

統括的展望

寺西 基之

盛況ぶりとその裏の様々な問題

2025年の音楽界はかなりの盛況ぶりを呈したといっていよい。少なくとも東京では夥しい数の演奏会が開かれ、多数の外国の演奏家や名門団体の来日公演が行なわれるなど、コロナで演奏会の中止が相次いだ時期がもはや遠い時代のことのように思えるほどの活況ぶりがみられた。その一方で物価高や円安をはじめとする経済の状況は演奏会やイベントの開催に大きな影響を与え、チケット価格の高騰を引き起こしており、また不穏な国際情勢も影を落としているなど、一見の盛況の裏には様々な問題も存在している。

それを象徴しているのがウィーン国立歌劇場の引越し公演だった。コロナ禍で途絶えていたこの名門歌劇場の来日が9年ぶりに実現することで大きな話題となったが、それ以上に目を引いたのはチケットの値段である。S席が平日で79,000円、土日は82,000円、最低のE席でも平日26,000円、土日29,000円という空前の高値となり、当然ながらこれで果たして買う人がいるのかという声が当初は多かった。しかし蓋を開けてみれば《フィガロの結婚》《ばらの騎士》の2演目併せて計9公演がすべて完売といった盛況裡に終わったのである。

ウィーン国立歌劇場だけではなく、7月に河口湖のステラシアター（野外音楽堂）で開催されたグスターボ・ドゥダメル指揮によるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の「ヴァルトビューネ河口湖」の公演はなんとVIP席が100,000円、アリーナ席50,000円、S席45,000円で完売したし、11月にはクリスティアン・ティーレマン指揮のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、キリル・ペトレンコ指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、クラウス・マケラ指揮のロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団という世界の3大名門オーケストラが重なるよう到来日、いずれもがチケットは高額だったが（S席ではウィーン・フィルが47,000円、ベルリン・フィルが50,000円、コンセルトヘボウ管が38,000円）、やはり結果はほぼ売り切れたという。たしかに今の円安では海外まで聴きに行くよりも日本で聴くほうが安いと考えることはできるし、コロナ後の反動需要、海外の名門だけに興味のある層やよいものを聴くにはお金に糸目をつけないマニアの存在など、この完売現象には様々な背景がある。円安や航空運賃・ホテル代などの高騰ではこの値段を付けざるを得ないという主催者側の言い分も理解できるし、

またそれだけの購買力を持つ層があることが今回明らかになったともいえる。ただ今後もこうした状況が続いてチケットが売れるかはわからないし、ウィーン国立歌劇場を観るためにそれまで続けてきた日本のオーケストラの定期会員をやめた人がいるというような話を聞くと、果たして音楽界全体が活気づいているのかどうかは疑問と言わざるを得ない。

もっとも名門以外の演奏会もそれなりの活況をみせ、オーケストラやリサイタルでも外来か日本人演奏家かを問わずチケットがよく売れる公演がいくつもあった。ただそれが人気アーティストの出演する公演や話題性のある演奏会に偏りがちであったこともたしかである。特定の若手の人気ピアニストたち、国際的な大コンクールの優勝者・入賞者など必ず集客が見込めるアーティストを起用することはここ2、3年目立ってきていたが、その風潮がさらに強まった感があり、その分内容は良くて地味な演奏会は集客にますます苦勞するようになるという傾向があったようだ。もちろん主催者側としては売れる公演を作ることは必要だし、最近の人気アーティストのほとんどは実力も兼ね備えているので演奏会自体は充実したものとなることが多いが、ネームバリューに頼らざるを得ない風潮が強まっているのは健全ではないだろう。

相次いだ海外オーケストラの来日

もちろん演奏の質はそうした問題とは別な話で、内外の団体・アーティストともに注目すべき優れた公演が多かった。来日オーケストラでは上記の3大名門がそれぞれの美質を存分に発揮、ウィーン・フィルのブルックナーの交響曲第5番はこのオケ独自の艶やかな音色がティーレマンの壮大で剛毅な造型と溶け合い、コンセルトヘボウ管のマーラーの交響曲第5番は楽団の伝統である芳醇でまろやかな質感を持った響きに若きマケラの先鋭なアプローチが結び付いた名演に結実した。特に注目したいのは前述のようにベルリン・フィルが7月と11月の2度にわたって来日したことだ。これほどの名門が年に2回も日本に来るのは稀なことで、7月にはドゥダメルの指揮による野外コンサート「ヴァルトビューネ河口湖」で華麗なノリのよい演奏を聴かせ、11月は首席指揮者・芸術監督のペトレンコの指揮でこの楽団の持ち味である重厚さ（ブラームスの交響曲第1番）とヴィル

トゥオーゾ性（バルトークの《中国の不思議な役人》およびストラヴィンスキーの《ペトルーシュカ》）を發揮するということに、表現力の幅広さを披露して楽団の底力を見せつけた。

他にも夥しい数のオーケストラが日本にやってきた。山田和樹はバーミンガム市交響楽団を率いてムソルグスキーの《展覧会の絵》をヘンリー・ウッドの編曲で取り上げ、マケラはベルリオーズの《幻想交響曲》でパリ管弦楽団から鮮烈な色彩を引き出したほか、フィルハーモニア管弦楽団、ベルリン放送交響楽団、バンベルク交響楽団、トーン・キュンストラ管弦楽団、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、スイス・ロマンド管弦楽団、ワルシャワ国立フィルハーモニー管弦楽団、ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団、ポーランド国立放送交響楽団、バイエルン国立管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ロサンゼルス・フィルハーモニックほか日本を訪れている。室内管弦楽団としてはアンドラーシュ・シフが率いるカペラ・アンドレア・バルカが解散前の最後の来日を果たし、味わいある名演で有終の美を飾った。古楽オーケストラではルネ・ヤコブス指揮ビー・ロック・オーケストラがヘンデルのオラトリオ《時と悟りの勝利》で鮮烈な印象を残している。

日本のオーケストラの活動

日本のオーケストラの公演も注目すべきものが多かった。NHK交響楽団はヘルベルト・ブロムシュテットやシャルル・デュトワといった長老指揮者が円熟の至芸を披露する一方で、弱冠25歳の新鋭タルモ・ペルトコスキが研ぎ澄まされた精妙な演奏で類い稀な才腕を發揮している。東京都交響楽団は下野竜也の指揮で東京文化会館大ホールの客席を含む空間を生かしてミュライユ、夏田昌和、黛敏郎の作品の壮大な音響世界を具現化、大阪フィルハーモニー交響楽団は音楽監督の尾高忠明のタクトのもとでエルガーの大作《ゲロンティアスの夢》を壮大に歌い上げ、東京交響楽団はジョナサン・ノットが音楽監督最終年の集大成としてブリテンの《戦争レクイエム》などで名演を聴かせた。大阪の4つの楽団がいずれもホールの主催・企画により山田和樹の指揮でメンデルスゾーンの交響曲全5曲を取り上げたのも注目される。

楽団の主催による演奏会形式もしくはセミ・ステージ形式のオペラが多かったのも特筆すべきで、セバステアン・ヴァイグレ指揮読売日本交響楽団による《ヴォツェック》、柴田真郁指揮大阪交響楽団の《運命の力》、阪哲朗指揮山形交響楽団の《トスカ》、高関健指揮東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の《ドン・カルロ》、沼尻竜典指揮神奈川フィルハーモニー管弦楽団の《ラインの黄金》、トレヴァー・ピノック指揮紀尾井ホール室内管弦楽団および山下一史指揮愛知室内オーケストラによる《コジ・ファン・トゥッテ》

など、いずれも意欲的な姿勢が窺える内容だった。また東京・春・音楽祭の主催ではマレク・ヤノフスキ指揮N響の《パルジファル》、ノット指揮東響の《こうもり》、オクサーナ・リーニフ指揮読響の《蝶々夫人》という3つのオペラが演奏会形式で上演されたほか、秋のリッカルド・ムーティによる「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」では《シモン・ボッカネグラ》が取り上げられ、イタリア・オペラの真髄を日本に伝えたいというムーティの意気込みが入念なりハーサル（これは連日公開された）と本番をとおして見事に結実した。

オペラの注目公演

舞台上演によるオペラとしては、新国立劇場では大野和士が細川俊夫の新作《ナターシャ》を世界初演して話題を呼んだほか、リチャード・ジョーンズ演出の新制作《ヴォツェック》を指揮して芸術監督としての存在感を示している。上岡敏之の指揮による東京二期会の《さまよえるオランダ人》は深作健太の斬新な演出が光り、びわ湖ホールでは芸術監督の阪哲朗が《死の都》を故・栗山昌良の演出で取り上げて美しい世界を作り出した。セイジ・オザワ松本フェスティバルは沖澤のどか指揮、ロラン・ペリー演出でブリテンの《夏の夜の夢》を上演、幻想的な舞台が繰り広げられ、小澤征爾亡き後もこの音楽祭が彼の精神を継承していることをアピールしている。古楽オペラも濱田芳通率いるアントネッロのモンテヴェルディの《オルフェオ》が高く評価され、またヘンデルの《ロデリンダ》を調布国際音楽祭（鈴木優人指揮バツハ・コレギウム・ジャパン）と北とびあ国際音楽祭（寺神戸亮指揮レ・ボレアード）の2つの音楽祭が取り上げたことも興味深い。近藤謙の《羽衣》の日本初演（サントリーホール主催）が実現したことも特筆されよう。

日本人アーティストの活躍

リサイタルや室内楽は大物から新進まで数えきれないほどの演奏会が開催され、ここで個別に取り上げる余裕はないが、日本人アーティストの活躍には一部触れておこう。長老では数えて90歳を迎える左手のピアニスト館野泉が「卒寿記念コンサート」を開催して健在ぶりを示し、腕の故障から復帰した81歳の前橋汀子はベートーヴェンのヴァイオリンソナタ・ツィクルスで今なお進化を続けていることを明らかにした。原田幸一郎は弟子たちを集めた「80歳記念コンサート」で室内楽と指揮で円熟の演奏を披露している。デビュー40周年を迎えたピアノの小山実稚恵をはじめとするベテラン世代の活躍も目立った。その下の世代では、大胆なアプローチで様々な表現の可能性を追求しているヴァイオリンの佐藤俊介、新たなレパートリーを次々と開拓しているピアノの阪田知樹など、従来の枠に捉われることなく意欲的な活動を展開しているアーティストが多いのは

頼もしいかぎりだ。前述の細川俊夫の《ナターシャ》の主役に抜擢された新進メゾ・ソプラノの山下裕賀をはじめとして声楽のジャンルでも優れた逸材が出てきている。若手の弦楽四重奏団の筆頭に挙げられるクアルテット・インテグラの活躍もめざましい。

国際コンクールでの日本人の成績も目を見張るものがあり、エリザベート国際王妃コンクールでは第2位に久末航、第5位に亀井聖矢が入賞、ショパン国際コンクールでは第4位に桑原志織が入賞、進藤実優が入選、シベリウス国際ヴァイオリンコンクールではMINAMI (吉田南) が第2位を受賞した。米田寛士はブザンソン国際指揮者コンクールで優勝という快挙を成し遂げている。

音楽祭の話題

各地の主だった音楽祭も例年通り開催されたが、特記したいのは新しく青森でスタートした「青い海と森の音楽祭」である。ともに青森出身の指揮者の沖澤のどかとソプラノ歌手の隠岐彩夏が青森県の音楽振興を図るべく創設したもので、一流演奏家たちに声をかけ、県内各地へのアウトリーチ活動とともに演奏会を開催して、県民の多くにクラシックに触れてもらうことを意図している。最終日の祝祭オーケストラ公演は2,000人収容のホールが満席となり、スタンディングオベーションが起こる盛況ぶりだった。今後の発展がおおいに期待できそうだ。また宮崎国際音楽祭は音楽監督がこれまでの徳永二男から三浦文彰に代わったのに伴って出演メンバーも一新され、とりわけチョン・ミョンフン指揮の音楽祭管弦楽団の演奏会は大きな盛り上がりを見せた。

衰退業界？

このように賑わいをみせた2025年の音楽界だったが、実際は厳しい状況が続いていることには変わりはない。新日本フィルハーモニー交響楽団は事務局の求人サイトで「衰退業界へようこそ」と呼びかけて大きな論議を巻き起こした。その是非はともかく、業界は生き残りをかけて様々な努力をし、衰退の道を辿らないようにいろいろな可能性を探ってきた。だからこそコロナ禍の最も厳しい時期も乗り越え、優れた意欲的な企画が相次ぐ今の状況に繋がっているわけで、その底力が今後も発揮されることを信じたい。

大阪・関西万博に期待する向きも当初はあったが、ことクラシック音楽に関する限り目立った企画はほとんどなかった(ドゥダメル指揮ベルリン・フィルの大阪公演も単に後援しただけで、万博主催ではない)。1970年の大阪万博は外国の大物アーティストや楽団を招聘したり日本の前衛音楽を特集する催しを行なったりして音楽界の起爆剤となったものだが、今や時代は異なり、万博の意義も万博に人々が求めているものも違ってきているので、万博に期待するほうがもともと無理というべきかもしれない。ただそれに

してもせっかくの機会に日本のクラシック音楽の発展を促す企画や日本の音楽水準を世界に披露するような企画が少しはあってもよかったのではないか。お隣の中国や韓国では音楽を含む文化を国力とみなしてその発展に力を入れており、クラシック文化でも今や日本を追い越そうという勢いがある。文化は国力であるという認識を日本の政治家はもっと持つべきだろう。

追悼

2025年も音楽界に長年多大な貢献をしてきた偉大な音楽家たちがあの世に旅立った。特にまだまだ現役を続けられたはずの秋山和慶が不慮の大怪我で入院中に肺炎で死去(享年84)したことは日本の音楽界にとってきわめて大きな損失だったといえるだろう。山形交響楽団の創立指揮者で地方の音楽界の発展に生涯身を捧げた村川千秋(享年92)、リンツ・ブルックナー管弦楽団や読響のコンサートマスターを歴任し、近年はソリストとして我が道を行く活動を展開していた小林武史(享年94)、吹奏楽やアマチュア・オケの指揮に力を注いだ汐澤安彦(享年86)、京都にフランス音楽アカデミーを設立し、長岡京アンサンブルを組織するなど、演奏と教育の両面で多大な功績を残したヴァイオリニストの森悠子(享年80)、フランス音楽の第一人者で、アンサンブル奏者としても優れたセンスを発揮したピアニスト・作曲家の藤井一興(享年70)も世を去った。大阪フィルや札幌交響楽団や日本演奏連盟の事務局長を歴任し、晩年は富士山静岡交響楽団専務理事として活動するなど、日本のオーケストラ界・演奏界の発展に寄与し、各地の音楽祭など地方の音楽振興にも深く関わった宮澤敏夫の死去(享年81)も惜しみてあまりある。

寺西基之(てらにし・もとゆき)

上智大学文学部卒、成城大学大学院修士課程修了(西洋音楽史専攻)。音楽評論家として執筆活動を行う一方、(公財)東京交響楽団監事、(公財)東京二期会評議員、(公財)アフィニス文化財団理事、(公財)東京オペラシティ文化財団理事、(公財)日本ピアノ教育連盟評議員、(公財)日本交響楽振興財団評議員、日本製鉄音楽賞選考委員などを務める。共訳書に『グラウト／パリスカ 新西洋音楽史』、共著に『ピアノの世界』ほか。